

令和元年度 雲南市 特色あるふるさと教育事例集



令和2年 3月



**令和元年度
雲南市 特色あるふるさと教育事例集**

目次

大東小学校	・ ・ ・	1
西小学校	・ ・ ・	2
佐世小学校	・ ・ ・	3
阿用小学校	・ ・ ・	4
海潮小学校	・ ・ ・	5
加茂小学校	・ ・ ・	6
木次小学校	・ ・ ・	7
斐伊小学校	・ ・ ・	8
寺領小学校	・ ・ ・	9
西日登小学校	・ ・ ・	10
三刀屋小学校	・ ・ ・	11
鍋山小学校	・ ・ ・	12
吉田小学校	・ ・ ・	13
田井小学校	・ ・ ・	14
掛合小学校	・ ・ ・	15
大東中学校	・ ・ ・	16
海潮中学校	・ ・ ・	17
加茂中学校	・ ・ ・	18
木次中学校	・ ・ ・	19
三刀屋中学校	・ ・ ・	20
吉田中学校	・ ・ ・	21
掛合中学校	・ ・ ・	22

特色あるふるさと教育事例

学校名	雲南市立大東小学校		
学年	教科等	単元名	ふるさと教育の視点
4	総合的な学習の時間	赤川ホタルレンジャーになろう	赤川ホタルについて調べる活動を通して、地域の環境や地域の人の思いについて考える。

① 取組の概要

(1) 発達段階をふまえた探究型カリキュラムの構想

発達段階に留意し、「ふるさと教育の各学年でのねらい」を考えた。それを基に「総合的な学習の時間と生活科のねらい」を考えた。またホタルをテーマにした環境学習単元を全学年に位置付け、6年間を通した系統的な学びにより探究的な学びの深まりを目指すこととし、各学年の「ホタルに関する学習のねらい」「探究の四過程における児童の姿」「学校全体の年間指導計画」を作成した。

(2) 探究的な学びの授業実践

赤川ホタルの学習を中心に行う4年生において、ホタルを題材とした「探究的な学びの3サイクル」を展開した(表1)。

表1 探究的な学びの3サイクル

探究的な学びのサイクル	実施時期	各サイクルの単元の「学習課題」
第1サイクル	5~7月	「ホタルってどんな生きもの？」(15時間)
第2サイクル	9~10月	「なぜ赤川にはホタルがたくさんいるの？」(16時間)
第3サイクル	10~11月	「ホタルの住める赤川を守る作戦を考えて伝えよう！」(14時間)



② ふるさと教育の視点を持った授業(活動)にせまるための授業づくりのポイント(工夫)

探究的な学びの「生み出し」と「つながり」、そして「深まり」を目指し、各探究の過程における手立てを表2のように行い、授業を実践した。

表2 各探究の過程で行った手立て

①課題の設定	○思考ツールを用いた児童の既存知の整理 ○児童にとって驚きや違和感のある情報提示⇔考えたい必要感の獲得 ○問い返しによる児童の言葉の活かし ○ゴールの表現活動の設定 ○単元の学習活動の流れの共有
②情報の収集	○課題に応じた情報収集活動の設定 ○「情報収集プランニングシート」と「計画・振り返り、次時への見通しシート」による調べ活動のPDCAサイクルの構築 ○情報収集のための図書資料や調査活動、出前講座などの選定と準備(学校司書や地域、外部の専門家と連携して)
③整理・分析	○思考ツールの活用と、ペアやグループでの話し合い活動による、「情報の収集」段階で得た情報の整理・分析活動 ○ペアやグループ間での情報交換による、自分たちの整理・分析の練り直しの場の設定
④まとめ・表現	○ゴールの表現活動の目的や相手意識、見通しの具体化(「表現活動の5W1H」の話し合い) ○まとめや表現活動の「計画シート」の作成 ○教師からの「伝えるコツ」や「伝えるモデル」の提示 ○グループ間での情報交換による練り直しの場の設定(アドバイスタイム) ○地域の人との思いの伝え合いの場の設定

③ 児童に見られた変容

児童においては、探究の各プロセスへの意識が高まり、学びへの意欲や姿勢の向上が見られた(表3)。合わせて、地域への肯定的な意識・態度の獲得が見られた。

表3 児童の探究的なプロセスへの意識の変化 (① 5/15⇔②7/18⇔③11/25 ; %)

調	設問内容	1. はい	2. どちらでもない	3. どちらでも行かない	4. いいえ
(1)	自分で調べたいことを決めて調べている。	34⇔66⇔67	38⇔31⇔33	24⇔3⇔0	3⇔0⇔0
(2)	自分で調べたいことについて、説明したり本で調べて情報を集めることができる。	37⇔61⇔61	51⇔28⇔36	6⇔11⇔3	6⇔0⇔0
(3)	集めた情報から、自分で調べたいことに必要な情報を選んだり、仲間としたりしている。	37⇔53⇔56	31⇔28⇔39	23⇔19⇔6	9⇔0⇔0
(4)	自分が調べたことを分かりやすく伝えることができる。	23⇔39⇔42	34⇔44⇔44	31⇔17⇔14	11⇔0⇔0

特色あるふるさと教育事例

学校名	雲南市立西小学校		
学年	教科等	単元名	ふるさと教育の視点
5	総合的な学習の時間	人にもコウノトリにも安全・安心な田んぼづくりに挑戦!	<ul style="list-style-type: none"> ・歴史的な背景、人々の思いを知り、現代の環境も踏まえながら、課題を明確にして環境問題について考えることができる。 ・これまで調べたことや課題から、コウノトリと共生できるふるさとづくりについて地域と共に考えていくことができる。

①取組の概要

第1次 — 人にもコウノトリにも、安心安全な田んぼを作ろう。

- 1) より良い自然環境作りのためにできることを考えよう。
- 2) 田植えに挑戦。
- 3) より良い田んぼにするために、必要なことを調べよう。(減農薬)
- 4) 「よけじ」(生き物の退避溝)を広げよう。
- 5) 稲刈りをしよう。
- 6) 田んぼの生き物調査しよう。(季節ごとに計4回)

第2次 — 田んぼ作りを通して学習したことを、みんなに伝えよう。

- 1) 収穫した米をどのように活用するか考える。
- 2) いきいき発表会・市教育フェスタに向けて、学習した内容をまとめよう。
- 3) 発表で思いを伝えよう。



よけじの生き物調

②ふるさと教育の視点を持った授業(活動)にせまるための授業づくりのポイント(工夫)

- 1) 地域の様々な「ひと」「もの」「こと」を巻き込んだ探究的な学習

コウノトリが舞うふるさとをめざして、田んぼづくりの中で何ができるのか考え、その中で生まれた新しい課題を地域の様々な「ひと」「もの」「こと」(地域で農業を営む方、いろいろな専門家や専門機関、コウノトリ関係の諸施設・機関等)を活用しながら、解決していく。

- 2) 調べたことを発表する機会の活用

いきいき発表会では、西小児童・保護者・地域の方へ、市教育フェスタでは教育関係者・雲南市民へ等、さまざまな人に発信することを目標に学習意欲を高めていく。



田の草取り(減農薬)



地域講師を活用した授業

③児童・生徒に見られた変容

- 1) 体験の中で出てきた課題を探究的に解決していこうとする力がついてきた。
- 2) ふるさとの生態系の豊かさや田んぼのすばらしさを認識し、ふるさとを愛する心が育ってきた。
- 3) さまざまな発表に向けて意欲的に取り組み、堂々と発表することができた。
- 4) 学校アンケートで「ふるさとには、人に伝えたいよい所がある」という項目が95%をこえた。



学習発表会



市教育フェスタで発表

特色あるふるさと教育事例

学校名	雲南市立佐世小学校		
学年	教科等	単元名	ふるさと教育の視点
3	総合的な学習の時間 (国語)	ふくしについて考えよう	・地域の高齢者と継続的に関わる中で、児童の社会性を育み、地域の一員として自分にできることを考える。

1 取組の概要

- (1) 交流センターのデイサービスに参加し、デイサービスプログラムを体験すると共に、高齢者と交流する。(6月)
- (2) 社会福祉協議会の方から福祉についてのお話を聞き、高齢者疑似体験を行う。(6月)
- (3) 国語「もうどう犬の訓練」の学習に合わせ、目が見えない人や耳が聞こえない人、介助を必要とする人について学習する(9月)
- (4) 1回目の福祉交流をもとに、高齢者と楽しめることを考え、計画・準備をして交流する。(11月)
- (5) 2回目の福祉交流をふりかえり、成果と改善点を話し合い、3回目の福祉交流を計画・準備し交流する。(2月)
- (6) 学習公開日に合わせ、福祉学習で取り組んできたことを発表する。(2月)

2 ふるさと教育の視点を持った授業(活動)にせまるための授業づくりのポイント(工夫)

- (1) 地域の高齢者との継続的な関わり

福祉学習として年間3回の交流の場を設定した。1回目はデイサービスの体験、2回目は1回目と高齢者体験を生かして児童の計画運営、3回目は2回目の反省を生かした計画運営と福祉学習で学んだことの発表を行った。PDCAサイクルを繰り返す中で児童にとって主体的で探究的な学びを行うことができた。

また、地域の高齢者の方が喜ぶ姿を見たり、「ありがとう」「気持ちいいよ」「楽しいね」など声をかけてもらったりすることで、さらに児童の意欲が高まっていった。

- (2) 高齢者疑似体験による主体的な学び

1回目の福祉交流の後、社会福祉協議会の職員さんによる福祉についての学習と高齢者疑似体験を行った。

高齢者の動きにくさや見えにくさを体験することで、児童は1回目に関わった高齢者のことを考え、「次は正面に立って話しかけよう」「立ったり座ったりするときには手伝いたい」など感想をもつことができた。

- (3) 地域との連携

福祉学習を行うにあたって、佐世交流センターのデイサービス担当の方、社会福祉協議会の方と打ち合わせを行った。年間を通しての学習の流れと学習のねらいを示してお願いしたことで、学校が望む場を提供してもらうことができた。また交流センターの方からも、児童が主体的に高齢者と関わることを歓迎する声が聞かれた。



3 児童・生徒に見られた変容

回数を重ねるごとに福祉交流を楽しみにし、意欲的に活動する姿が見られた。「肩もみは喜んでもらえるから次もしよう」「遊びが2つだと暇そうな人もいたから増やそう」「歌やダンスがあると楽しそうだったよ」など主体的に考えて計画や準備をする姿が見られた。また学習のまとめでは、一人一人が高齢者のために自分にできることを考え、行っていきたいという振り返りをもつことができた。

特色あるふるさと教育事例

学校名	雲南市立阿用小学校		
学年	教科等	単元名	ふるさと教育の視点
3	総合	「ヤマタノオロチ伝しょう地めぐり」をしよう	おろちにまつわる伝説を調べたり、現地見学をしたりして、雲南市のよさを知る。

①取組の概要

- 1) ヤマタノオロチの紙芝居を読んで内容を知る。
- 2) 雲南市内のヤマタノオロチ伝承地について調べる。
- 3) 地域講師と一緒に伝承地めぐりをして実際に見聞きし、説明を聞く。
- 4) 見学したことを劇にして学年発表で全校、保護者へ情報発信する。

②ふるさと教育の視点を持った授業（活動）にせまるための授業づくりのポイント（工夫）

○紙芝居により、児童の視覚、聴覚に訴え、イメージがわくようにし、興味・関心をひき出すこととした。

児童の知りたいこと、明らかにしたいことを大切に、まず自分たちで調べるようにした。インターネットや家庭での聞き取りを行った。そのことによって、地域講師といっしょの見学の際に、予備知識を持って説明を聞いたり、実物を見たりすることができるようにした。

○自分たちの知りたいことや調べてもわからないこと、行ってみたいところを焦点化し、伝承地めぐりのプランを地域講師とともに設定した。そのことによって、自分のこととして見学に臨めるようにした。

○パンフレットを作って下級生に紹介することを目的にすることで、自分たちがわかったり考えたりしたことを、よりわかりやすく伝えるための工夫をするようにした。自分たちが発表することによって、自分たちの学習活動とともに、地域のよさについても味わわせることができるようにした。

③児童・生徒に見られた変容

○神話には、児童がよく知っているお話もあるが、中には難しい内容も含まれている。そこで、自分たちの知りたいことを大切に、調べたり、見学プランを立てたりすることで、課題解決的な学習活動を行うことができた。

○パンフレットを作って下級生に紹介する場を設けたことによって、自分の言葉でオロチ伝説を説明しなければならないと考えたことが、児童の思考を深めることにつながった。また、調べる、聞く、見学するという、重層的な活動を確保したおかげで、内容があるものとなった。



特色あるふるさと教育事例

学校名	雲南市立海潮小学校		
学年	教科等	単元名	ふるさと教育の視点
2	生活科	どきどきわくわく町たんけん	地域の名所や人に直接ふれ、そこでの「ひと・もの・こと」との出会いを大切にする。

① 取組の概要

1) 海潮の町へ「たんけん」に出かける計画を立てる。
 ・たんけんに行く場所は、児童との話し合いで決める。

2) 町たんけんへ出かけ、すてきなところやひみつを見つける。
 <パート①>…須山商店、わたなべ散髪屋
 <パート②>…海潮むら農園、海潮駐在所
 <パート③>…海潮郵便局
 <パート④>…百彩市



3) 見つけたひみつを誰に、どうやって伝えるのかを話し合っで決める。
 ・伝え方の例をいくつか挙げ、児童との話し合いで決める。

(1) 「学習発表会」で児童、保護者、地域の方へ、海潮むら農園のことを紹介する。

(2) 校内「クイズラリー」を行い、全校児童や教職員へ、町たんけんで見つけたことをクイズにして紹介する。



② ふるさと教育の視点を持った授業（活動）にせまるための授業づくりのポイント（工夫）

○地域のさまざまな「もの」「ひと」との関わり

- ・町たんけんへ行く計画の段階で、何のために行くのかをしっかりと話し合うことで、その場所だけでなく、地域の「ひと」や「もの」に興味関心をもつようにする。
- ・町たんけん後、カードに見つけたひみつを書くと事前に伝えることで、児童が進んで「ひと」や「もの」に関わる意欲が高まるようにする。

○相手意識をもった発信の場の設定

- ・町たんけんに行って終わりではなく、そこで見つけた町のすてきなところやひみつを発信する場を設ける
 発信方法は話し合っで決め、児童の意欲が高まるようにする。

③ 児童・生徒に見られた変容

○町たんけんでは、事前に質問事項を挙げておくのではなく、その場に行って児童の主体的活動に任せることで、自ら進んで質問したり、メモしたりする姿が見られた。

○クイズラリーを実施したことで、町たんけんの成果を自らクイズとして表すことができ、全校へという相手意識をもって一人一人が考えて話そうとする姿が見られた。クイズラリーは、1回の発表とは違い、何度も、そしていろいろな人と関わりながら楽しんで行うことができ、有意義な発信の場であったと考える。



6つの場所に分かれ、ペアでクイズラリー実施。（2日間）

特色あるふるさと教育事例

学校名	雲南市立加茂小学校		
学年	教科等	単元名	ふるさと教育の視点
3年	総合的な学習の時間	加茂のお宝を発見しよう	地域の特産物や文化を知り、それにかかわる人々の思いに触れることで、地域の良さを感じ、大切にしていこうとする心情を育む。

①取組の概要

- (1) 加茂のお宝について調べる。(家の人などへのインタビュー)
- (2) お茶、ぶどう、祭りについて調べ、新聞等にまとめる。
(見学・地域講師の活用・インターネット・図書・パンフレット等)
- (3) 地域の宝について学んだ事をまとめ、地域へ向けて発信する。(学習発表会)

②ふるさと教育の視点を持った授業(活動)にせまるための授業づくりのポイント(工夫)

- (1) 初めに自分たちで加茂のお宝について考えることで、多様な意見や価値観を引き出し、認めることで、自分たちで加茂の良さを見つけていこうとする意欲を持たせる。
- (2) 見学に行ったり、地域講師の方に話を聞いたりするときは、お宝を守るための苦労や喜び、繋げていこうとする思いについて必ず触れてお話ししていただくようにする。
- (3) 学んだ事を発信する場を設定し、良さを伝えることで自分たちも加茂のお宝を守っていこうとする意欲をもつことができるようにする。

③ 児童・生徒に見られた変容

- (1) 自分たちが住む地域、加茂町の良さや特徴について、学び 初めての児童であったので、自分たちで考えた宝の中には地域のお店や公共施設などを上げる児童が多かった。しかし中には、朝の挨拶立ち番に立ってくださる方など、自分たちの暮らしに関わっていただいている人に目を向けた児童もいた。さらに、家庭へインタビューをする中で、お茶やぶどうなどの農産物を知り、調べ学習に繋げていった。



- (2) それぞれのお宝について詳しく知っていく中で、興味をもち、更に図書やインターネットなど利用して調べる児童の姿が見られた。また、調べるだけでは分からない、お宝を守る人の思いに触れることで、児童もまた、そのお宝への価値を高めていくことができた。
- (3) お宝について学び、まとめをする中で、自分たちにもできないことがないかと考えたとき、自分たちの学びを地域へ向けて発信することが上がり、自分たちがみつけた加茂のお宝の良さを伝えようという意欲をもった。

実際に地域の農産物や文化を見学しに行ったり、地域講師の話を聞いたりすることで、「知ること」「思いに触れること」が充実した活動になり、児童の大きな学びに繋がったものと考えられる。



特色あるふるさと教育事例

学校名	雲南市立木次小学校		
学年	教科等	単元名	ふるさと教育の視点
3	総合的な学習	さくらの町・木次	地域の名所に関わる「ひと・もの・こと」と出会い、大切さ、すごさを改めて考える。

①取組の概要

1) 木次の「さくら」についてグループに分かれ調べる。

- ・子どもたちが興味をもったことでグループに分け、雲南市が出しているパンフレット、インターネット（タブレット端末）、お家の人に聞くなどして調べる。
- ・その中で「桜守さん」、「観光について詳しい人に話を聞きたい」という意見が出てきた。

2) ゲストティーチャーとして来校していただき、話を聞く。

- ・桜のお世話をしておられる桜守さん・市役所観光振興課の方に来ていただき、子どもたちが疑問に思ったことや桜のことについてお話を聞いた。



3) 調べてわかったことをタブレット端末で新聞にまとめる。

4) 校内に掲示し、保護者や他の学年に見てもらうことで、「木次のさくら」のすばらしさや、お世話をしてもらえる方の思いなどを伝える。

②ふるさと教育の視点を持った授業（活動）にせまるための授業づくりのポイント（工夫）

1) さくらに関わる「もの」「ひと」の連携

- ・さくらについて調べるだけでなく、実際にさくらに関わる「ひと」にじっくり関わることでさらに雲南市のすばらしさに興味関心をもてるようにする。

2) 目的意識をもった成果発表の場を設ける。

- ・調べてまとめるだけでなく、完成した新聞を保護者に配布し、学習発表会で掲示した。相手を意識し、学習成果をまとめていくことで子どもたちは、意欲的に学習に取り組むことができていた。また新聞を読んだ感想を保護者からもらった。「初めて知ったことがあった」「見出しがわかりやすくまとめてあってわかりやすかった」などの感想があり、子どもたちの自己肯定感が高まった。



③児童・生徒に見られた変容

1) 「さくら」について学習することで、身近に咲く花について興味関心をもつ児童が増え、保護者の方に調べたことを話す児童などもいた。

2) 新聞にまとめ、保護者からよかったところやアドバイスももらったことでそれらを他の活動に生かす児童がいた。

特色あるふるさと教育事例

学校名	雲南市立斐伊小学校		
学年	教科等	単元名	ふるさと教育の視点
3	総合的な学習の時間	地いきのお年寄りの方となかよくなるろう	地域のお年寄りの方々とふれあいを通して、豊かな人間性を育む。

① 取組の概要

- 1) 第1回ふれあい交流会（交流センター主催）での交流活動の計画を立て、準備をした。
- 2) 地域のお年寄りの方と一緒に、第1回ふれあい交流会を実施した。
- 3) 第2回ふれあい交流会（交流センター主催）での交流活動の計画を立て、準備をした。
- 4) 地域のお年寄りの方と一緒に、第2回ふれあい交流会を実施した。
- 5) 第1回、第2回ふれあい交流会で交流したお年寄りの方全員に、年賀状を書いた。

② ふるさと教育の視点を持った授業（活動）にせまるための授業づくりのポイント（工夫）

- 1) 地域のお年寄りの方に楽しんでいただくということをめあてに、ふれあい交流会の計画を立てた。
「お年寄りの方に楽しんでいただけるゲーム」、「お年寄りの方によく聞こえる挨拶」など、具体的な視点を示して、プログラムを考えさせた。
- 2) 交流会を2回実施し、1回目の経験や気づきをもとに2回目の交流会の計画を立てることができるようにした。
- 3) 交流したお年寄りの方へ年賀状を出すことで、交流した方とのつながりを深めた。



③ 児童・生徒に見られた変容

- 1) 1回目の計画では、どのようなことをしたら楽しんでいただけるのかがよく分からず、不安に思う児童がいた。また、自分達が楽しいと思えるゲームに偏りがちの班もあった。しかし、交流会ではお年寄りの方々がとても喜んでくださり、楽しい気持ちで帰校することができた。
2回目の計画では、お年寄りの方のことをしっかりと考え、喜んでいただけるように意欲的に計画を立て、準備をすることができた。
- 2) お年寄りの方々が交流会を楽しみに待っていてくださったり、楽しかったと言ってくださったりしたことから、児童は達成感や自己有用感をもつことができた。

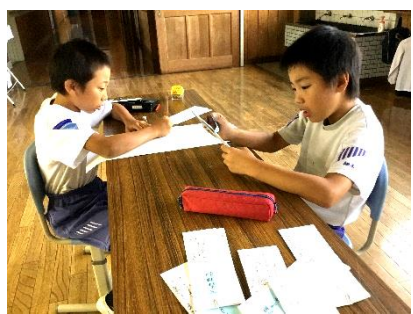


特色あるふるさと教育事例

学校名	雲南市立寺領小学校		
学年	教科等	単元名	ふるさと教育の視点
4	総合的な学習の時間	ヤマタノオロチ伝説にせまる	雲南市に伝わる「ヤマタノオロチ伝説」とゆかりのある地をめぐり、そこでの「ひと・もの・こと」との出会いを大切にする。

①取組の概要

- 1) ヤマタノオロチ伝説やゆかりのある地について、パソコンや家の人にインタビューして調べる。
- 2) ゆかりのある地について実際に調査する。
→釜石、布須神社、大森神社、印瀬の壺神、温泉神社、天ヶ淵、ヤマタノオロチ公園、八本杉に行き、「もの・こと」についてくわしい方に直接お話を聞く
- 3) 調査で分かったことやそこに関わる人の思いをまとめる。
- 4) 分かったことや伝えたいことをまとめ、劇にして伝えるための台本を作る。
- 5) 学習発表会で発表する。

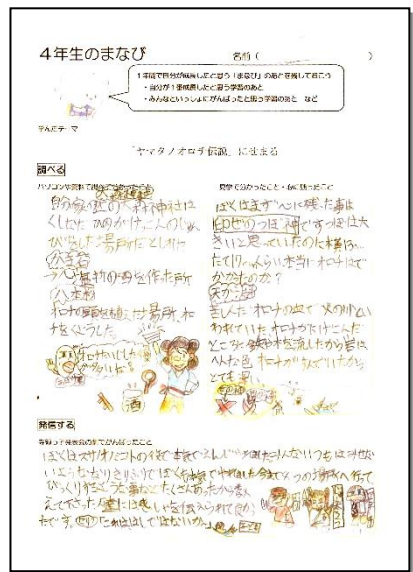


②ふるさと教育の視点を持った授業（活動）にせまるための授業づくりのポイント（工夫）

- 1) 見通しを持った体験活動を行う。
単元の初めに、調査したことを学習発表会で劇にして発表するというゴールを示し、見通しをもって学習が進められるようにする。
- 2) ヤマタノオロチ伝説にくわしい「ひと」との連携
ただその場所に行って「もの」や「こと」に触れるだけでなく、そこに関わる「ひと」と関わることで、さらに児童の興味や関心を高めたり、探究心に応えたりできるようにする。
- 3) 相手意識をもった成果発表の場を設ける
調べてまとめて終わりではなく、まとめたことを学習発表会で劇化して保護者、地域の方に伝えることにより、相手意識をもって表現することができるようにする。

③児童・生徒に見られた変容

- 1) ヤマタノオロチ伝説について調べる中で、ふるさと雲南市に関する知識を深めるだけでなく、「この伝説を語り継ぎたい」「ゆかりのある地を大切に守っていきたい」という思いをもつことができた。
- 2) 劇化に向けて、台本作りや小道具作り、セリフの言い回しなど、児童が工夫しながら主体的に活動を進めた。
- 3) 学習をとおして、知り得た知識や感じた思いを発表会でしっかりと表現していた。



特色あるふるさと教育事例

学校名	雲南市立西日登小学校		
学年	教科等	単元名	ふるさと教育の視点
3・4	総合的な学習の時間	ヤマタノオロチ伝説について伝えよう	地域に受け継がれる伝説や歴史を調べたり、地域の方の話を聞いたりすることで理解と愛着を深める。

①取組の概要

1. 地域コーディネーターから地域に受け継がれる伝説や歴史の話を聞く。
2. 資料を用いて、自分が興味や関心をもったことを調べる。
3. 地域の方と一緒にヤマタノオロチ伝説巡りに行き、詳しい話を聞く。
4. 聞いたことをもとに、一人一人が伝説ゆかりの地についてまとめる。
5. にしっ子発表会で何をどのように伝えたいかを話し合う。
6. にしっ子発表会で劇やクイズを通して地域の魅力を発信する。



②ふるさと教育の視点を持った授業（活動）にせまるための授業づくりのポイント（工夫）

1. 地域コーディネーターを活用する。
 - ・地域に詳しい人から直接話を聞くことで、学習内容に興味・関心をもつことができるようにする。また、身近な内容としてとらえることができるようにする。
2. ヤマタノオロチ伝説巡りに行く。
 - ・地域の方と一緒に伝説ゆかりの地を巡ることで、想像をふくらませながら話を聞いたり、知りたいことをその場で質問したりできるようにする。
3. 目的意識をもった発表の場を設ける。
 - ・にしっ子発表会で地域の魅力を他の学年の児童や保護者、地域の方に発信する場を設けることで、目的意識をもって調べたりまとめたりできるようにする。
 - ・発表の場にお世話になった地域の方を招き、学習の成果と感謝の気持ちを伝えることができるようにする。

③児童・生徒に見られた変容

1. 地域に受け継がれる伝説や歴史について調べる中で、ヤマタノオロチ伝説を地域の誇りとして感じる姿があった。
2. 発表会を通して、表現することに自信をつけたり、地域のよさを改めて感じたりする姿があった。
3. 調べてまとめることや学んだことを伝えることに自信が付き、他の学習も意欲的に取り組む姿があった。



特色あるふるさと教育事例

学校名	雲南市立三刀屋小学校		
学年	教科等	単元名	ふるさと教育の視点
6	総合的な学習	平和について考えよう ヒロシマ、ナガサキ、そして三刀屋・永井博士	永井隆博士ゆかりの地である長崎を訪れ、平和の尊さ、博士の偉大さを感じ、これまで学んできた「如己愛人」の精神を通して、平和のために自分にできることを考える。

①取組の概要

- 1) 先の戦争での原爆、広島や長崎の被害、永井博士の功績などを調べ、実際に広島と長崎を訪れて、被爆された人の話を聞いたり、現地で遺構を見たりして平和について学ぶ。
- 2) 調べたことを基に、国語の学習活動において平和作文に取り組み、永井隆平和賞式典に参加して平和についての思いにふれる。
- 3) 広島で調べたり感じたりしたことを、姉妹校の長崎市立山里小学校にむけたメッセージビデオで伝え、山里小の平和学習の様子もビデオにより学ぶ。
- 4) 広島、長崎で学んだことや、自分にできることを、かがやき発表会(学習発表会)にて保護者や地域の人に伝える。



②ふるさと教育の視点を持った授業(活動)にせまるための授業づくりのポイント(工夫)

- 1) 永井隆博士に係わる「ひと」「もの」「こと」との連携
1年生から系統的に「博士に学ぶ平和学習」に取り組み、永井隆博士生い立ちの家の見学や地元の方の話、永井博士の生涯を描いた書籍やDVD、博士をよく知る方の講演資料、博士の功績を受け継ぐ長崎市立山里小学校への訪問など様々な角度から、人間「永井隆」の生き方や平和を希求する姿勢、それを育んだ三刀屋の地を浮き彫りにする。
- 2) 自分の考えや想いを伝える場を設定し、目的意識を持たせる
発表会で伝えることを意識することで、調べ活動や講話などに対して集中力を高め、より意欲的に活動に取り組めるようにする。
- 3) 姉妹校の児童との交流活動を通して、自分の考えを深めたり、意欲を持たせたりする。
姉妹校である長崎市立山里小学校を訪問し、平和遺構を巡る
「平和ウォーク」に参加して一緒に学び、帰校後の交流活動を通して永井博士や原爆・戦争・平和に対する考えや想いを知り、自ら考えを深めたり、取り組んできたことをいかに伝えるか意欲を持たせたりする。



③児童・生徒に見られた変容

- 1) 伝えるという目的意識を持つことで、より調べ活動に意欲的になった。
- 2) 被爆地の広島・長崎ともに訪問し、姉妹校の児童との交流活動を通して、永井博士や戦争・平和への考えや、今の自分ができたことは何かという想いを深めたり、広げたりすることができた。
- 3) 学習したことをまとめて発表する活動を行い、どうすれば相手に分かりやすく伝わるかを意識するようになった。



特色あるふるさと教育事例

学校名	雲南市立鍋山小学校		
学年	教科等	単元名	ふるさと教育の視点
3・4	総合	地域の良さを見つけよう (ちょんてごと交流しよう)	地域の高齢者の方と交流を通して地域の一員として自分たちができることを考える。

① 取組の概要

- 1) 第1回ちょんてごサロンでの交流活動の計画を立て、準備をする。
- 2) 地域の方と一緒に第1回ちょんてごサロンで交流する。
- 3) 第2回ちょんてご訪問での交流活動の計画を立て、準備をする。
- 4) 第2回ちょんてご訪問をし、お店開きをして地域の人と交流する。
- 5) 第3回ちょんてご訪問での交流活動の計画を立て、準備をする。
- 6) 第3回ちょんてご訪問をし、その中で、学習発表会でしたパプリカの歌とダンスを披露し、地域の方と一緒に大きい年賀状を作る。
- 7) 交流センターに完成した大きな年賀状を持っていき、掲示のお願いをする。交流センター、ちょんてごカフェに掲示してもらう。
- 8) 自分たちが学んできたことの中から課題を見つけ、地域の方の思いを調べてまとめ、発表する。



② ふるさと教育の視点を持った授業（活動）にせまるための授業づくりのポイント（工夫）

- 1) 地域の「ひと」や施設（「もの」）との連携
地域に住んでおられる高齢者の方について知り、実際にちょんてごの活動に訪問し、自分たちで考えた企画と一緒に交流する活動を行うことで、より「ひと」や「もの」に興味・関心をもてるようにする。
- 2) 目的意識をもった発表の場を設ける。
地域の人に自分たちができることを考え、どんなふうに伝えたいか、そこでの自分の成長をイメージし、そのためにする。
- 3) 体験活動を通して、自分のことをふり返る。
ちょんてご訪問の体験活動を通して、地域の一員として、自分にできることは何かと考えることにつなげる。

③ 児童・生徒に見られた変容

- 1) ちょんてごさんとの第2回の訪問では、高齢者の方に楽しんでもらうためには、どんなお店にするか、よく見えるように看板を作ったり、座ってできるように考えたりしてあいて意識を持って活動に取り組む姿が見られた。
- 2) 体験活動後、高齢者の方にわかるように伝えられたか、友達と協力できたか、自分の役割を果たせたかということについてふり返ることにより、自尊感情を高めることができた。



特色あるふるさと教育事例

学校名	雲南市立吉田小学校		
学年	教科等	単元名	ふるさと教育の視点
3・4	総合的な学習の時間	広がれ ふれあいの輪 (障がい者福祉)	福祉についての話を聞いたり、体験したりすることを通して、地域に住む高齢者や障がい者に対して、自分たちにできることを考える。

①取組の概要

- (1) 福祉の考え方などについて話を聞き、福祉について考える。
- (2) 高齢者施設(とちのみ)を訪問し、高齢者の方と一緒に活動する体験を通して、高齢者福祉の実際を学び、自分たちにできることを考える。
- (3) 「アイマスク体験とガイドヘルプ体験」を通して、視覚障がいの方の気持ちを考え、自分たちにできることを考える。
- (4) 島根ライトハウスライブラリーを訪問し、視覚障がいの方の日常生活の様子を聞いたり、点字体験をしたりして、実際の生活を学び、自分たちにできることを考える。
- (5) 視覚障がいの方の話聞くことを通して、視覚障がいの方の気持ちを考え、自分たちにできることを考える。
- (6) お世話になった講師の方や施設の方へお礼の手紙を書く。
- (7) 自分たちが学んだこと、感じたことをリーフレットにまとめ、発表する。



②ふるさと教育の視点を持った授業(活動)にせまるための授業づくりのポイント(工夫)

- (1) 地域の「ひと」や施設(「もの」との連携
雲南市社会福祉協議会の職員の方、視覚障がいの方、高齢者施設(とちのみ)の職員の方、島根ライトハウスライブラリーの職員の方と連携して学習を進めていく。
- (2) 目的(ゴール)をもった、成果発表の場の設定
学んだり、感じたりしたことをまとめて終わるのではなく、学級内での発表会を通して自分たちの学びを発信することをゴールとする。目的を明確にすることで、相手を意識したまとめ方や伝え方をできるようにする。
- (3) 体験活動を通して、自分のことを振り返る
高齢者の方と一緒に活動する体験・アイマスク体験・ガイドヘルプ体験・点字体験などの体験活動を通して、自分たちの身の回りにいる人たちに思いをはせ、自分にできることを考えることにつなげる。また、お礼の手紙を書くことを通して、自分の学びを振り返るとともに、お世話になった方への感謝の気持ちをもてるようにする。



③児童・生徒に見られた変容

子どもたちは視覚障がいのある方だけに限らず、困っている人を見かけたら声をかけたり、手をかしてあげたりして、助けたいという気持ちをもつことができた。また、お世話になった方々へのお礼の手紙を書くことを通して、自分たちの学んだことを振り返ることができ、その中で自分がこれからどんなことができるのかも記入することができた。今回の学習を通して学んだことから、さらに自分が詳しく調べたいと思ったことを子どもたち1人1人がリーフレットにまとめ、その中で自分がこれからどんなことができるのかも記入し、発表することができた。



特色あるふるさと教育事例

学校名	雲南市立田井小学校		
学年	教科等	単元名	ふるさと教育の視点
3・4	総合的な学習の時間	深野川探検隊	田井の地域に関心を持ち進んで調べようという意欲を持つ。 学習を通して、ふるさとの良さに気づくことができる。

①取組の概要

- 1) 自分たちの住んでいる町に流れている深野川に実際に行き、気づいたことや、調べてみたいことを話し合う。
- 2) 講師の方を招き、深野川に住んでいる水生生物や深野川の水質について調査を行う。
- 3) 調べて分かったことや、感じたことなどをポスターにまとめる。
- 4) それぞれがまとめたことを発表し合う。
- 5) まとめたものを掲示し、自分たちの活動やふるさとの自然について他学年の児童に知ってもらう。



②ふるさと教育の視点を持った授業（活動）にせまるための授業づくりのポイント（工夫）

1) 地域の自然との関わり

実際に調査に出かけ、体験することでさらに興味や関心を持てるようにする。

2) 講師の方との連携

地域のことをよく知っている方に来てもらい、一緒に活動をしたり直接話を聞いたりすることで、新しい発見をしたり良さを知ったりすることができるようにする。

③児童・生徒に見られた変容

- 1) これまでに学習したことや自分が知っていることを出し合い、分からないことは自分たちで調べて工夫をしながらまとめることができた。
- 2) 水生生物の調査の際に見つけた生き物をいくつか教室で飼育し羽化させた。調査を通してきれいな水で生活する生き物がたくさんいることを知り、喜びを感じるとともに自然を守っていこうという心情が育った。



特色あるふるさと教育事例

学校名	雲南市立掛合小学校		
学年	教科等	単元名	ふるさと教育の視点
4	総合	三刀屋川の豊かさを伝えたい	地域を流れる三刀屋川を調べ、川の豊かさや環境などを守るためにはどんなことができるか考える。

①取組の概要

- 1) 川に関する本の紹介を聞き、地域の川（三刀屋川）で何を見ているのかを考える。
- 2) 地域の川（三刀屋川）へ出かけて情報を集める。
- 3) 誰に、何を、どのようなやり方で伝えるのかについて話し合い、学習計画を立てる。
- 4) グループで調べていくことを決め、情報を収集する。
- 5) グループでまとめ方や発表の仕方を考える。
- 6) 発表会を開き、三刀屋川の豊かさを伝える。



フィールドワークの様子（三刀屋川）

②ふるさと教育の視点を持った授業（活動）にせまるための授業づくりのポイント（工夫）

1) 地域CNや地域の方など「ひと」との連携

地域CNと連携し、教育的効果をより高めることができ、かつ安全面を考慮した見学地を選定した。また、地域の人材を紹介してもらい、現地で話を聞いたり、質問したりすることで、地域の川についてより興味や関心をもてるようにした。



地域の方に話を聞く様子（源流）

2) 目的意識をもった成果発表の場の設定

自分たちが調べた地域の川の豊かさを他学年に伝えるという目的意識をもって学習に臨ませた。調べた内容や伝える相手に応じたまとめ方、表現の仕方を工夫できるように、劇やペープサート、フリップ、クイズなどといったさまざまな表現方法を提示した。

③児童・生徒に見られた変容

- 1) 成果発表の場を設定したことにより、自分たちが調べたことをただ伝えるだけでなく、聞く側の視点に立ち、より分かりやすく伝えるにはどうすればよいか、より興味をもって聞いてもらうためにはどうすればよいかについて考え、工夫しながら活動する姿が見られた。
- 2) 川に住む生き物や環境、利用といったさまざまな視点から調べ、まとめる活動を通して、地域の川の魅力に気づき、これからも地域の川を大切にしていこうという意欲を高めた。

特色あるふるさと教育事例

学校名	雲南市立大東中学校		
学年	教科等	単元名	ふるさと教育の視点
1	総合的な学習の時間	雲南市探訪	地域の名所や特産に直接触れ、そこでの「ひと・もの・こと」との出会いを大切にす。

①取組の概要

自分で興味を持った「雲南市内」の6町について、調査する活動を4月から計画的に実施した。

- (1) 事前に図書などを使って調べ、訪問先を決定した。
- (2) 6月には地域コーディネーター（「ひと」の活用）を招き、アドバイスをいただいて決定した。
- (3) グループで訪問する場所を選定し、事前に訪問の挨拶状を送り、9月体験活動の準備を行った。
- (4) 訪問の前には「マナー講習」を実施し、質問するときのマナーや作法を学んだ。
- (5) 実際の訪問では、施設の方々や地域の人々に質問して、事前調査で疑問に思ったことなどを解決していった。
- (6) 訪問時は、直接、雲南市の「文化財」ともいえる「もの」や「こと」に触れ、神社や記念館などで学習を深めた。
- (7) 訪問後は、お礼の手紙を書き、お礼の作法なども学んだ。
- (8) 訪問で得た情報は、事前調査と合わせてまとめを作り、グループごとにポスターによるプレゼンを行った。
- (9) 代表者が、保護者の前で口頭発表も行った。
- (10) 全員のポスターは2月に実施された「参観日」などで展示発表した。
- (11) 評価を夢発見ファイルに綴じた。
- (12) 理科の授業と連携して、「たたら製鉄」実習を行った。



②ふるさと教育の視点を持った授業（活動）にせまるための授業づくりのポイント（工夫）

- 雲南市の持つ有用な「もの」「ひと」について自分で気づくように観光パンフレットなどを市役所から取り寄せ、全国に誇ることでできる文化があること気づけるよう配慮した。
- 地域の人のお話を直接聞くことで、地域への愛着を深め、身近な学びになるよう配慮した。
- まとめに使う写真は自分で撮影した。これはまとめが意識できていないと写せないで、取材・撮影・まとめというセットの学習を行った。（プレゼンの仕方）
- 「たたら製鉄実験」は直接、鉄ができるさまを体験でき、「鉄」の性質や地域への興味が増すよう企画した。



③児童・生徒に見られた変容

- 感想や振り返りでは、地域のよさに改めて気づいたなどの「地域への誇り」が感じられるものが多数あった。
- 直接訪問や地域の人々への直接インタビューを通して、地域の人々の温かさや地元を大切にしている気持ちなどを感じることができた。
- 「たたら鉄」の金属光沢などの実習から得た体験の記憶が学習への意欲につながった。



特色あるふるさと教育事例

学校名	雲南市立海潮中学校		
学年	教科等	単元名	ふるさと教育の視点
全学年	総合的な学習の時間	地域の特産品について学び、ふるさと「海潮」の魅力を探ろう！	地域の特産に直接触れ、そこでの「ひと・もの・こと」との出会いを大切にする。

①取組の概要

茶畑の整備

・学校所有の茶畑の草を集めたり、捨てたりする。草は肥料としてお茶の木の下に入れり、余分な草は捨てたりする。



茶摘み

・お茶の葉の摘み方を確認してから、作業を行う。
 ・縦割り班毎に収穫するエリアを決め、茶摘みをする。
 ・集めた茶葉は発酵を防ぐため、その日のうちに地元の加工業者に持ち込み加工してもらう。 ※(1)(2)は同じ日に行った。



地域の特産「大東茶」について学ぶ。

・※加工業者（大東藤原茶問屋）から、大東茶の歴史、お茶の種類、栽培、加工、成分や効能などについて学ぶ。その次に、おいしいお茶のいれ方について教えてもらう。
 ・教わったいれ方に従って摘んだお茶を使って、試飲する。



②ふるさと教育の視点を持った授業（活動）にせまるための授業づくりのポイント（工夫）

見通しをもって計画的に実施する。

・年度当初に茶摘みの最適な時期を加工業者に確認し、行事計画の中に入れておいてもらう。その上で、お茶の学習をどのように進めていくか、ふるさと学習担当で検討、計画立案、教職員への周知をする。
 ・生徒主体で活動できるよう、茶畑整備、茶摘み実施前に縦割り班の班長と打合せをし、活動が円滑に進められるようにする。
 ・茶の木への施肥や草刈りは教職員が行い、生徒には刈った草を集めたり捨てたりする作業をしてもらう。

地域に関わる「人」との連携

・学校所有の茶畑に行って茶葉を摘んだり、試飲したりするだけでなく、お茶に関わる「人」から直接お茶への思いを聴くことで、さらに「もの」や「こと」に興味や関心をもてるようにする。



③生徒に見られた変容

・地元業者から直接話を聴くことで地域の特産品であることを知り、地域のブランド「大東茶」に誇りと愛着をもつことができた。
 ・お茶の効能やおいしさを知ること、日常的に愛飲しようとする生徒が増えている。
 ・地域の特色を知り、今後の地域のあり方や自分の生き方について考えようとする事ができた。

特色あるふるさと教育事例

学校名	雲南市立加茂中学校		
学年	教科等	単元名	ふるさと教育の視点
1	総合	ふるさと探訪	地域の名所や事業所の調査・訪問をとおして、ふるさとの魅力について理解を深める。

① 取組の概要

- (1) 市内各地域の名所や事業所について調査する。
 - ・加茂町を除く市内5町を3コースに分け、担当したコースについて調べる。
 - ・生徒が事前に事業所等に連絡をとって訪問の目的や時間について打ち合わせたり、質問項目を考えたりしておく。
- (2) バスを使ってコースごとに4～6カ所程度を訪問し、インタビューや写真撮影を行い資料作りする。
- (3) グループで、集めた資料をもとに学んだことを模造紙にまとめて発表した後、校内に掲示する。



② ふるさと教育の視点を持った授業（活動）にせまるための授業づくりのポイント（工夫）

- (1) これまでの学習との関連づけ
 - ・地元の加茂町については小学校で学習しているのでふるさとのエリアを広げ、雲南市全体に目を向けるようにする。
- (2) 地域の「ひと」との連携
 - ・訪問先の事業所に加え、史跡や名所訪問の際にも地域の方にガイドをお願いし、情報を得るだけでなく地域の「ひと」の思いを感じさせる。
- (3) 今後の学習との関連づけ
 - ・見学先、体験先の選定や行程表の作成などの活動はまとめのしかた等も含め、2学期の松江自主研修や2年生での修学旅行につなげていく。



③ 児童・生徒に見られた変容

- (1) 地元の加茂町においても、まだまだ知らないことが多い中で、雲南市に視点を広げ、各地域を回ったことでさまざまな発見や驚きがあり、近くにいながら遠かった「ひと」や「もの」にふれることができた。「もっと雲南市のことを知りたい」という気持ちを強く持った生徒が増えた。
- (2) この見学をきっかけとして、いろいろな職種について興味・関心を持つことで、今後の職場体験学習や進路学習につながっていくことを期待したい。



特色あるふるさと教育事例

学校名	雲南市立木次中学校		
学年	教科等	単元名	ふるさと教育の視点
1	総合的な学習の時間	「みんなが住みやすい雲南市とは？」	地域の課題を見つけ、主体的に考え、よりよく問題を解決しようとする生徒の育成

①取組の概要

- 1-①昨年度の1年生の学習の様子を知る。
 - ②雲南市について現在自分達知っていることや考えていることを整理する。
- 2-①雲南市の現状について知る。
 - ②課題設定をする。
- 3 課題追究（軌道修正）、まとめ、発表方法決定、準備、練習をする。
- 4-①学級報告会を経て、全体発表会に向けて修正と練習、想定問答をする。
 - ②全体発表会と学習の振り返りをする。



②ふるさと教育の視点を持った授業（活動）にせまるための授業づくりのポイント（工夫）

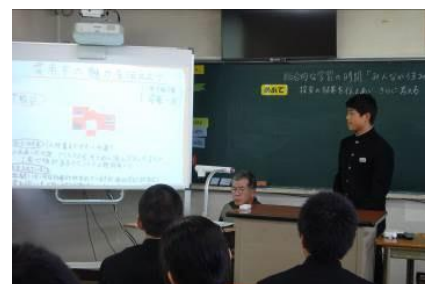
- ・ 1-①②でめあてや学習計画を明確にし、昨年度の様子などを視覚的に伝えることで意欲をもたせることと、雲南市の現在の姿を明らかにするために、生徒なりの自由な発想を大切にKJ法等を用いて考えを整理していたこと。
- ・ 2-①では地域自主組織の代表者を招いて、雲南市の現状・実態を生徒にも分かりやすく説明してもらったこと。
- ・ 2-②では一人一人の考えを大切にしながらも、ある程度の見通しをもたせるように指導者が助言したこと。
- ・ 3では学校図書館資料等を準備してできるだけ生徒の力で進められるようにして、助言等は最低限にとどめるようにしたこと。
- ・ 4では相手意識を大切に、最もふさわしい表現手段を各自で決定させるようにしたことと、探究結果の発表にとどまらず発信・提言にまで高められるように助言したこと。



③児童・生徒に見られた変容

振り返りには次のような記述が見られた。（抜粋）

- ・ 斐伊のことならけっこう知っていると思っていたけれど、新たに分かったことがたくさんありました。（略）でも私達若い人ができることをすることで雲南市は変われます。
- ・ 雲南市民として、雲南市の観光地や良いところ、魅力などを市外や県外の人達にもっと紹介したり、自分の自治会が行っているイベントなどに積極的に参加したりして、流入人口が少しでも増えたらいいなと思いました。
- ・ これからの雲南市にとって大切なことは（略）誰もがこの雲南市の魅力を知った上で、関心を持ち続けることが大切ではないかと、今まで調べてきたり発表を聞いたりして思いました。



特色あるふるさと教育事例

学校名	雲南市立三刀屋中学校		
学年	教科等	単元名	ふるさと教育の視点
1, 2年	総合的な学習の時間	ふるさと学習 「ふるさとの伝統文化を受け継ごう」	<ul style="list-style-type: none"> ・ふるさとへの愛着を深め、ふるさとに誇りをもつ生徒を育てる。 ・地域の講師の方々から伝統を学び、本物のよさに直接触れることにより、地域の期待に応えようとする態度を育てる。

①取組の概要

- 地域に伝わる伝統芸能や文化を地域の人材を通して知り、ふるさとへの誇りを育む。
- コース別の縦割り学習にし、異学年間で協力しながら見通しをもって、ねばり強く取り組む力を育てる。
- 学習成果発表会で、作品展示及びビデオ上映等しながら学習成果を報告する。

②ふるさと教育の視点を持った授業（活動）にせまるための授業づくりのポイント（工夫）

- 1) 地域の方々との連携
地域の方々に講師を依頼し、地域との関わりを通して、伝統文化に興味・関心をもてるようにする。
- 2) 目的意識をもった成果発表の場の設定
学んだ伝統文化や創作した作品等を学習成果発表会で報告することを目的にし、意欲的に参加できるようにする。
- 3) 活動の振り返りと講師の方への礼状作成
活動の振り返りと講師の方への礼状作成を通して、ふるさと学習で学んだことをしっかりと振り返り、伝統文化のよさやふるさとへの愛着を高める。

③児童・生徒に見られた変容

一人一人が熱心に作品を作ったり、発表ビデオの作成に向けて意欲的に練習に参加したりする姿が多く見られた。講師の先生とのふれあいを通して、ふるさとを身近に感じることができた。特に神楽コースでは、練習時間の延長を希望する声もあるなど、完成度の高い演技をしたいという意欲が見られた。アンケートによると、約9割の生徒が体験学習を通して「本物のよさを実感することができた」「講師の先生方と楽しく関わることができた」と回答した。



特色あるふるさと教育事例

学校名	雲南市立吉田中学校		
学年	教科等	単元名	ふるさと教育の視点
全学年	総合的な学習	吉田の芸能	ふるさとの「ひと・もの・こと」と積極的に関わり、ふるさとに愛着と誇りを持ち、ふるさとに貢献する生徒の育成をめざす。

①取組の概要

- ・開設講座名 ①火焰太鼓 ②深野神楽
- ・班編制…受講希望のアンケート結果により、全校生徒の縦割り班とした。
 - ①火焰太鼓 20名（1年10名、2年7名、3年3名）
 - ②深野神楽 9名（1年4名、2年3名、3年2名）
- ・活動時間 2時間×6回（全12時間） 文化祭での発表
- ・活動内容
 - ①火焰太鼓 吉田地区の和太鼓を練習し、文化祭で発表した。吉田の方が作曲された「清流」と「三宅」を演奏した。
 - ②深野神楽 田井地区の深野神楽を練習し、文化祭で発表した。今年度は演目「五行」を演舞した。



②ふるさと教育の視点を持った授業（活動）にせまるための授業づくりのポイント（工夫）

- 1) 地域で伝統芸能に携わっている「ひともの」との連携
各講座とも地域講師として学習に参加していただき、指導をしていただいた。また、地域で使用している和太鼓や深野神楽の衣装等もお借りして、練習や文化祭での発表を行い、より本物に近い伝統芸能を経験することができた。
- 2) 目的意識を持った成果発表の場を設ける
練習した成果は文化祭で発表する場を設け、友達はもちろん講師の方や保護者、地域の方にも見ていただき、意欲を持って活動に取り組めるよう計画した。



③児童・生徒に見られた変容

- 1) 縦割り班で継続して取り組むことで、上級生から下級生に指導することで、リーダー性や自己有用感を高めることができた。また、自然に他学年との交流ができ、学校生活全般にわたって親しく交流する雰囲気が築けた。
- 2) 地域の方に指導していただき、伝統芸能に携わる方への尊敬と感謝の気持ちを高めることができた。
- 3) 学習発表会ではそれぞれの講座とも自信をもって自分達の練習の成果を発表することができ、本校の研究目標である「表現力の育成」の観点からも表現力が高まったといえる。



特色あるふるさと教育事例

学校名	雲南市立掛合中学校		
学年	教科等	単元名	ふるさと教育の視点
全	総合的な学習の時間	掛合の魅力発信プログラム	地域の伝統文化に直接触れ、掛合の魅力を発信し、伝承しようとする。

①取組の概要

- 1) 掛合町の伝統文化（掛合太鼓コース、掛合トランプコース、一式飾りコース）の課題を考える。
- 2) コースごとに体験活動や体験活動講師の話から分かったことやそこに関わる人の思いをまとめ、課題解決の方法を探る。
- 3) 学年ごとのグループに分かれ課題を解決する方法を考える。
- 4) 課題を解決する方法を発表する。



②ふるさと教育の視点を持った授業（活動）にせまるための授業づくりのポイント（工夫）

- 1) 掛合町の伝統文化に関わる「ひと」と連携する

掛合町の伝統文化に関わる「ひと」とじっくりと関わり、体験活動をすることで、掛合町の課題を見つめ直し、解決方法を意欲的に考える。

- 2) 課題解決方法を多角的に考える場を設ける

掛合町の課題についてコースごとに考えたり、学級で考えたりし、情報を共有することでよりよい解決方法を考える機会を増やす。

- 3) 目的意識をもった成果発表の場を設ける

他コースの同級生に自分のコースの良さや課題を伝える発表会を行うことで、自分のコースの伝統文化の課題を分かりやすく発表する方法を工夫できた。また、国語の授業で学習したまとめの方法（1年新聞、2年パワーポイント、3年スピーチ）と関連づけることで他教科との関連が図れた。



③生徒に見られた変容

- 1) グループで分からないことを自分たちで直接講師に聞き取りをするなど、自分たちの課題を解決するために主体的・積極的に活動を進める姿が見られた。
- 2) 「掛合町のよさを他地域にアピールしたい」、「掛合町の伝統文化を残さなければならない」というふるさとを思う気持ちが強まった。
- 3) 縦割りのグループ学習を行なったことで、異年齢集団でも自分の意見を堂々と言える力や、下学年を思いやる気持ちが育った。
- 4) 話し合い活動が積極的に行えるようになった。

